

2007年度国立音楽大学音楽研究専修 研究発表会
(音楽学研究コース・音楽情報社会コース) 専門ゼミ I, II



戦争と音楽

～失われたもの、生まれたもの～

日時：2007年11月19日(月) 16時30分開演(16時開場)

場所：国立音楽大学 6号館110スタジオ

●図書館テーマ展示●

期間：2007年11月12日～11月30日

展示場所：図書館ブラウジングルーム/AV資料室

「戦争と音楽」という大きく複雑な問題を、
戦争を体験したことのない私たちはどう捉えていくべきなのでしょうか。
いくつかのテーマを取り上げ、音楽に見られる戦争の影響を
ジャンルにとらわれず、多角的に考えていきます。

戦争と音楽

～ 失われたもの、生まれたもの～

2007年度国立音楽大学音楽研究専修 専門ゼミ 研究発表会

「音楽は和平をもたらす力となるか」という問いに、ピアニストかつ指揮者であるダニエル・バレンボイムはこう答えた、「音楽に力はない」と。そんなふうにはっきりと言い放ったという事実は私たちに衝撃を与えた。果たして本当にそうなのだろうか。しかし現在も戦争は行われていて、私たちがこうして過ごしている間も世界のどこかで血を流している人がいる。そこで世界の在るべき姿は平和であるということはもちろん、音楽大学で学ぶ者として音楽的なメッセージも必要であると考えた。音楽は時に戦意高揚に貢献し、時に平和に貢献している。そして戦争によって失わざるを得ない音楽もあれば、戦争によって生まれた音楽もある。

大きなテーマであるが故に答えを出すことは難しい。それを承知の上で、反戦を訴えるということではなく、事実を伝えるということに重点を置き、切っても切り離せない関係である戦争と音楽について考えていきたい。

目次

戦時下の音楽	2
敗戦国と戦勝国	2
反戦歌	2
メディアと音楽	3
クラシック音楽の系譜	3
図版	4
展示資料	6

戦時下の音楽

戦時下の音楽というのは国や時代によって様々ではあるが、日本において言うならば戦時下の音楽を大きく二つに分けると、昭和元年頃～10年頃のもの、昭和10年頃以降のものに分けられる。昭和初めの時代は文化爛熟の時代であり、新しい風俗・メディア、多様な音楽による坩堝の時代だった。ラジオやトーキー映画といった新しいメディアによって更にジャズやシャンソンなどが流行し、日本の音楽文化に変化が現れようとしていた。しかし、昭和10年代に入ると戦争の影響が音楽文化にも大きく現れはじめる。戦前、人々を元気づけるための応援歌として軍歌や軍国歌謡が増え始めた。

そして昭和16年、太平洋戦争に突入。この頃から学校教育での音楽も大きく変わり、天皇制軍国主義国家を象徴するような歌を歌わせるようになっていた。戦争という中で音楽は如何なる存在だったのか。今ある観点で捉えるのではなく、その時を知り、その時の音楽と向き合うことで昨今の日本に少しずつ意識を向けられる「平和の危機」という問題にも繋がっていくのでは、と私たちは考える。

敗戦国と戦勝国

第二次世界大戦後、敗戦地として沖縄には多くの米軍基地ができた。ベトナム戦争時代の1960年代後半から70年代前半、最も盛況だったコザ（現在の沖縄市）のジャズやロックのライブハウスは、この米軍基地なしには誕生しなかっただろう。オキナワン・ロックといわれる音楽のルーツがここにあるのだ。また、元をたどれば子どもの玩具であり、今日では教育にも用いられているカンカラ三線も、物資不足の戦時中に三線の代替品として作られた。日本で唯一の地上戦があった、沖縄。そこには戦争の影響を受けた音楽が今も様々な形で存在している。日本は戦勝国であり、そして敗戦国でもある。古今東西、戦争経験のある国が山ほどあり、時代と深く結びつく文化や芸術は時に人間の有り様を生々しく綴る。戦後に存在する音楽そのもの、また多くの優れた作曲家・演奏家が、各々の題材を通して私たちに訴えかけるものとは一体何なのだろう。ここでは、戦争を知らない私たちが、戦争の影響を受けた音楽をどう受け止めたら良いのかを考察していきたいと思う。

反戦歌

今、平和や反戦という言葉強く主張すると、ものすごく青臭く、アナクロな理想主義者のように思われてしまう。逆に、憲法改正や核武装の必然を語るのが、さも大人の現実主義のように感じられてしまう。そんな中で、「反戦」と「平和」という言葉をリアルなメッセージとして構築し、生きるものへ語りかける手段に「反戦歌」がある。反戦歌とは、戦争に対する抗議のメッセージを歌詞に込めた楽曲の総称だ。特にベトナム戦争当時の反戦フォークは世界的なムーブメントとなったが、現在では幅広いジャンルにおいて様々な反戦歌が歌われている。ある特定の戦争に向けて書かれた曲からアーティスト本人が公言せずとも平和を願った反戦歌ととれる曲まで、時代をさかのぼってみると私たちが気づいていないだけで意外と多くの反戦歌が存在しているのだ。例えば、

森山良子の『さとうきび畑』は沖縄地上戦に、元ちとせの『死んだ女の子』は広島原爆にそれぞれのせた反戦歌である。そして最も有名な反戦歌と言っても過言ではない、『imagine』を生み出したジョン・レノンは大膽な反戦活動を行った。他にもボブ・ディラン、ルイ・アームストロング、美空ひばり、ザ・フォーク・クルセダーズ、森山良子など多くの著名なアーティストが反戦メッセージを私たちにに向けて発信している。

メディアと音楽

音楽は多様なメディア（例えばレコード、ラジオ、テレビ、楽譜など）を通じて広まっているが、戦時下においては自国の音楽を推奨し、他国（敵国）の音楽を抑圧するためにメディアの統制が行われる。このようなメディアへの放送禁止や出版禁止といった圧力は、特定の音楽の演奏を直接禁止にするよりも、さらに大きな体制翼賛的效果を発揮すると言える。なぜなら、メディア統制の現場は通常ヴェールに覆われていて、大衆に届く音楽があたかも自然と体制翼賛的なものになってきたかのような印象を与えられるからだ。しかし他国音楽のすべてが禁止されるわけではない。例えば、第二次世界大戦中の日本において、「蛍の光」（スコットランド民謡）はすでに十分定着しているとの理由で、禁止を免れたことがある。この時期の日本に関して、ドイツ・イタリアとは同盟国であったため、「クラシック」の全てが禁止になるようなことはなかったのだが、どのようなメディア統制によってどのクラシックが禁止されたか、またそれによって人々の音楽受容の在り方はどのように変化したか、というのはとても興味深い問題である。

クラシック音楽の系譜

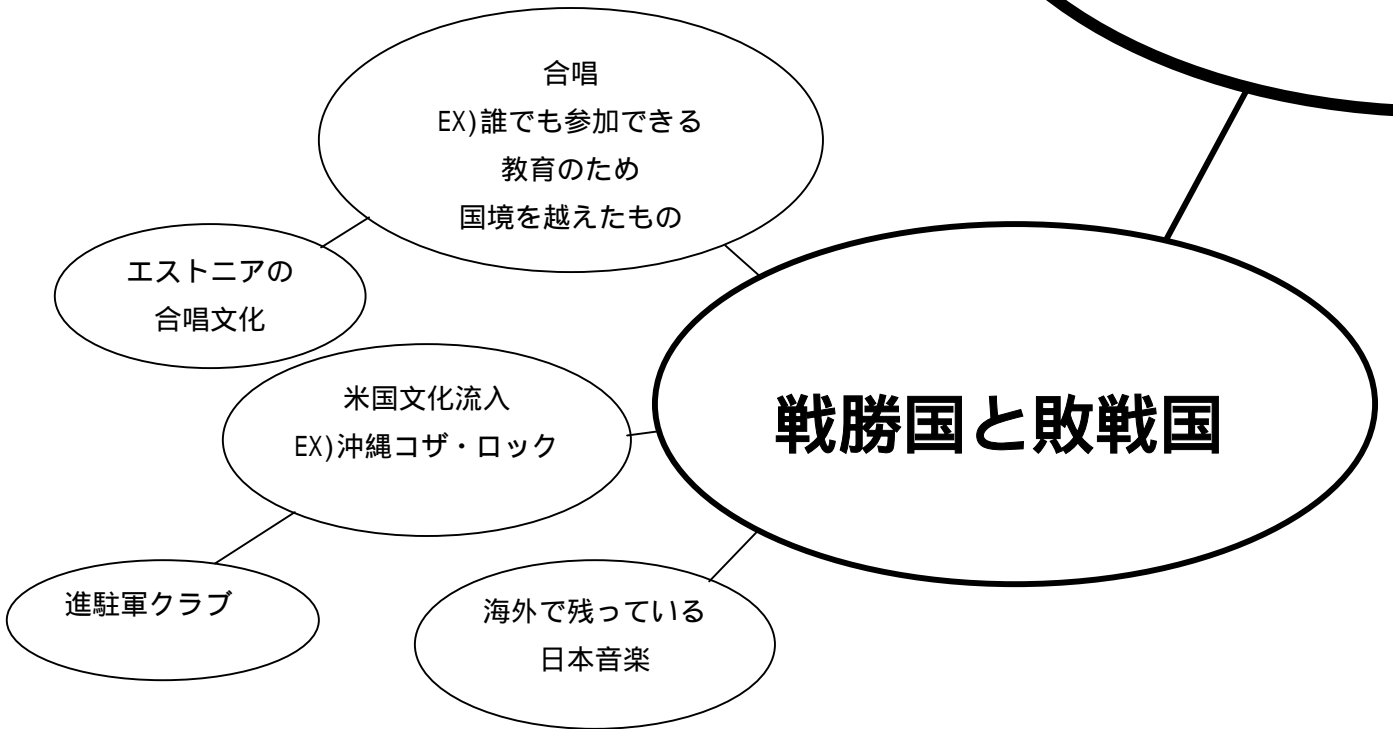
戦争は、人類の歴史を語る上では切っても切り離せない関係にある。同様に、私たち人間の所産である音楽も、実は戦争と深く結びついている。クラシック音楽の歴史を学ぶ際、私達はしばしば、音楽の発展の系譜のみを追ってしまいがちである。しかし、音楽史の中には様々な戦争の影響が潜んでいる。最もわかりやすい例は、戦争を描写した音楽。古くは中世・ルネッサンスの時代までさかのぼるが、この頃の音楽は特に戦争を描写したもの、また戦争と関わりが深いものが数々存在する。それだけではなく、私達がよく知るモーツァルトやベートーヴェン、シューベルトなども当時の戦争を描写した作品や、戦争に影響された作品を多く残しているのだ。また、概して歴史というものは勝利国がその中心となって描かれるものであり、音楽史も同様だ。私たちが見落としがちなか点で言えば、西洋音楽史の多くがドイツを中心に描かれているという事実。私たちがクラシック音楽を演奏したり学んだりする際、ドイツの作曲家や作品が多いのではないだろうか。このようなドイツ音楽の優勢というのは、戦争と深く関わりがあると言えるだろう。今回は、このようなクラシック音楽における戦争と音楽の関わりについて取り上げ、私達が学ぶクラシック音楽は、今現在も世界のどこかで行われている戦争というものに、どのような影響を受けているのかを紹介したいと思う。

戦争を知らない世代、自由に音楽を楽しめる時代に生まれしてきた私たちにとって、戦争・戦いの歴史を軸に音楽を考察し、新しい視点で音楽史を描き出すことで様々な発見や新しい考え方が得られるのではないだろうか。



戦争と

戦争と音楽、何らかの形で絶対に命が関わっている





* この図は研究テーマを決める際に行ったブレインストーミングの結果を整理したものです。

展示パネル

第12回ピースフルラブ・ロックフェスティバル

沖縄最大のロックイベント。コザに関わりの深いロックバンド「紫」の再結成コンサート(1983)を第1回目として毎年継続開催され、今年で25回目。

日米の若者が集う、沖縄市野外ステージ。1994年9月19日。

出典:企画部平和文化振興課編『ロックとコザ』

紫のメンバー

沖縄ロック界の王者とも呼ばれ、沖縄の音楽とロックを融合しようと試みたバンド。コピー曲だけでなくオリジナル曲をやっても米軍人に受けたという。

76年に本土レコードデビューも果たしているが、78年に解散。

左から比嘉清正、リーダーのジョージ紫、城間正男、城間俊雄、下地行雄、チビ。

出典:企画部平和文化振興課編『ロックとコザ』

昭和の歌謡史 戦後編

右上 「そよ風の唄」楽譜(コロンビア 霧島昇、並木路子)

右下 松竹映画「そよ風」のスチール

真中上 並木路子のプロマイド

真中下 「悲しき竹笛」楽譜(コロムビア 近江俊郎、奈良光枝)

左上 「リンゴの唄」楽譜

左下 「リンゴの唄」レコード(コロンビア 霧島昇、並木路子)

出典:福田俊二編著『写真で見る昭和の歌謡史2(戦後編)』拓植書房,1992 請求記号:RXY-682a/S-2

昭和の歌謡史 戦前・戦中編

右上 「敵白旗を掲げるまで」レーベル(ニッチク 楠木繁夫、波平暁男、近江俊郎、高倉敏)

右下 「体当たり精神」レコード(ニッチク 霧島昇)

左上 「雷撃隊の歌」レコード(ニッチク 霧島昇)

左下 「神風節」レコードと袋(富士 永田絃次郎)

出典:福田俊二編著『写真で見る昭和の歌謡史1(戦前・戦中編)』拓植書房,1991 請求記号:RXY-682a/S

騎兵隊の襲撃

近代のクラシック音楽の歴史の中で、最も戦争とかかわりが深いイタリア未来派。20世紀初頭、イタリアを中心に起こった芸術運動であり、伝統的な美の概念を拒絶し、機会や文明の産物を芸術に取り入れようとした。騒音・雑音、また破壊的な行動を賛美し、「戦争」を音響のスペクタクルとして捉えた。未来派の画家、ボッチョーニによる「槍騎兵の襲撃」は、戦争に影響を受けた比較的初期の作品である。

出典:キャロライン・ティズダル、アンジェロ・ボツォーラ著;松田嘉子訳『未来派』PARCO出版,1992 請求記号:J74-696

歌集・レコードレーベル ア・ラ・カルト

出典:櫻本富雄著『歌と戦争:みんなが軍歌をうたっていた』アテネ書房,2005 請求記号:J104-847

三線工房まちだ屋 カンカラ三線

もともと植物などを用いて作る子どもの玩具だったが、物資不足の戦時下に、それでも音楽を求めた沖縄の人たちが米軍から支給された缶などで作った。

今日ではみやげ物として、また学校教育に用いられている。

出典:<http://machidaya.shop-pro.jp/?pid=775967>

黒田征太郎 ライブペインティング

黒田征太郎が、音楽にあわせて絵を描いていく。

奏者と黒田の魂が響きあい、キャンバスが音が刻々と変化していく。

ライブペインティングは、奏者と黒田の会話であり、互いが互いを理解し合いたいという欲求の現れであり、生きていることの確認なのです。

LIVE in KAMATA

(2004年10月31日黒田征太郎×近藤等則 in 日本工学院専門学校)

頭と胴体が分離したヒトが描かれた。

恐ろしくて、悲しくて、そして、ため息が聞こえた。

度肝を抜かれたこの日の早朝、イラクで日本人青年が命を絶たれた、と一報が入った。

画像提供: 株式会社ケイツー (<http://www.k2-d.co.jp/live003.html>)

「戦争と反戦歌 ウィー・シャル・オーバーカム」

ベトナム戦争勃発後、戦争当事者であるアメリカでも反戦の歌声は急速に高まっていた。アメリカの著名なフォーク歌手は相次いで来日し、そのうちの一人であるピート・シーガーは反戦活動を積極的に行った。その公演の先々で「We shall overcome」を教えていき、そしてこの歌は70年反戦歌の頌歌となった。

「昭和の戦時下の歌謡史」

昭和の戦時下の歌謡史をたどることが出来る年表とジャケット写真。なかなか知る機会の少ない昭和の歌謡曲に触れることが出来る。

「グラモフォン フィルム タイプライター」

エジソンによる蓄音機の発明は、音楽がラジオ、レコードなどのメディアを通じて広まるための決定的な一歩となった。しかしその同じ蓄音機の技術が、第一次大戦においては敵国戦闘機の位置を特定するためにも利用されていた。

ベートーヴェン ウェリントンの勝利(戦争交響曲)

現在はあまり知られていないが、当時は圧倒的な人気を得ていた曲。

山形新聞 2007年9月11日夕刊

図説 着物柄にみる戦争 (Image of War ; Kimono)

人の生活の中に根付いてきた芸術や音楽にはしばしば「戦争」が密接に関わってくるが、着物の柄にも「戦争」が取り入れられていたということはあまり知られていない。着物柄と戦争、この衝撃的な資料を集めた本書では当時本当に使われていた柄の数々を見ることができる。空を向いた砲弾、戦闘機、海軍の船、国旗、天皇の顔、戦争ごっこをする子供たちの絵、中には軍歌の一部分をとった五線譜もモチーフとしてしばしば現れる。いわゆる現代人の私たちの中にある着物柄の概念からはかけ離れたそのデザインに、まず言葉を失うだろう。人々はどのような思いでこの着物を作り、着ていたのであろうか。生きてゆくためにかかせない衣服さえも、物資の少ないこの時代にはメッセージの主張の場であった。

出典: [著者] 乾 淑子 編著 【出版】インパクト出版会

展示資料

情報センター出版局編 国歌：世界 167 カ国：写真集

各国の国歌につけられている詩を日本語訳しているため、その国の国歌が主張したいものがダイレクトに伝わってくる。また、その国の風景や民族の一部を写した写真がカラーで載っているため、国風も伝わってくるだろう。他に、歌詞のない歌が国歌になっている国のリストも挙げられているため、大変興味深い一冊となっている。

情報センター出版局, 2000 請求記号 C65-025

小田切信夫著 国歌君が代の研究

この本の特徴として、《外国から見た「君が代」》という視点を持っていることがあげられる。君が代について書かれた本は数多く存在するが、このような項目が設けられている本は珍しい。今回提示したのは 外国の「君が代」の記事の抜粋の部分だが、他に 外国語に訳された「君が代」という項目もある。

平凡社, 1965 請求記号 C58-265

軍歌と日本人 聴けば「やまと」の血が騒ぐ歌えばわかる「愛国心」と「人間愛」

別冊宝島 ; 1428 号 宝島社, 2007 請求記号 J111-479

小長久子著 楽聖滝廉太郎の新資料

あやめ書店, 1963 請求記号 :C18-991

渡辺裕著 日本文化モダン・ラブソディ

明治初期からの近代化とともに、邦楽はどのように変化したのか。また当時の音楽家はどのような活動をしていたのか・我々の邦楽に対する認識を改めて問う。

春秋社, 2002 請求記号 J97-057

戸ノ下達也著 戦時下音楽界の再編統合

清瀬保二メモにみる：楽壇新体制促進同盟から日本音楽文化協会へ

現代作曲家聯盟の委員長をしていた清瀬保二によるメモをまとめた一冊。戦時下の日本音楽界の変革の様子を読み取ることができる。

日中戦争の中、1940年から1941年にかけて発足された「楽壇新体制促進同盟」。本書にはその経緯や詳しい資料等、非常に専門的な内容が収められているのと同時に、当時の音楽家や音楽界の状況についての解説もある。

現代日本の作曲家 ; 別冊 2 音楽の世界社, 2001 請求記号 C65-974

企画部平和文化振興課編 『ロックとコザ(改訂版)』

沖縄市の出版する資料集の第四巻。4人の沖縄ロックミュージシャンたちの音楽活動、生活史を個人史としてとりまとめたもの。当時のコザがどのような場所だったのか、ベトナム戦中の沖縄でロックがどのような位置にあったのかを垣間見ることができる一冊。

沖縄市, 1998 請求記号 C62-945

武満徹：私たちの耳は聞こえているか

武満が亡くなる前に書かれた彼のエッセイである。直接的なテーマは戦争と音楽ではなく、サブタイトルにあるように、武満ならではの音の世界を通じて私たちの「耳」に触れているわけだが、彼自身の人生を振り返るためには戦争体験者としての過去は切っても切り離せないわけであり、実際に多くの死を目の当たりにしてきた作曲家である。そういった部分も含めて彼が何を意図して音楽を作ってきたかを感じられるだろう。

シリーズ 人生のエッセイ；9 日本図書センター, 2000 請求記号 :C64-596

宗左近作詩；三善晃作曲 女声合唱とピアノのための虹とリンゴ

女声合唱とピアノのための作品。去年6月に逝去された宗左近の詩集より三つの詩からなる。この作品はわが国立音楽大学の女声合唱サークルANGELICAによる委嘱作品である。「戦争」や「原爆」をもとにやはり「命」がテーマになっているが、美しく甘美でさえある旋律が印象的である。ここに、戦争体験者である三善が学生の女声合唱団に向けて書いた意味が存在する。

カワイ出版, 2005 請求記号 F23-966

寺島尚彦詩・文；大塚勝久写真・文；森山良子〔ほか〕文

さとうきび畑：ざわわ、通りぬける風

日本の反戦歌として最も有名な「さとうきび畑」。この曲の詩とともに、美しい沖縄の風景が詰まった本。この曲を歌うアーティストのインタビューなども盛り込まれている。

小学館, 2002 請求記号 J96-462

大浜徹也責任編集 戦争の記録：明治-平成

20世紀に起こった日本の戦争についての記録本。写真とともに詳しく解説が載っている。ほぼ10年ごとに戦争をしてきた20世紀の日本を分かりやすく説明している。

20世紀フォトドキュメント；第10巻 ぎょうせい, 1992 請求記号 R210.6/N/10

本多喜久夫著 戦争と音楽

昭和17年に発行された大変古い文献ではあるが、収録されている挿話はすべて戦場から取材したもので、血なまぐさい戦場を通して、音楽の純粋性と高度な芸術価値について書かれた貴重な記録である。戦場において、いかに音楽が精神的武器として威力を発揮していたのが、日本編と外国編に分かれて書かれている。

新興音楽出版社, 1942 請求記号 C31-056

フリードリヒ・キットラー著；石光泰夫, 石光輝子訳

グラモフォン・フィルム・タイプライター

蓄音機の発明は、その後のレコード、ラジオ、マグネットフォン(テープレコーダー)などの技術的基盤となった。音楽産業にとって欠かせないこれらのメディアはしかし、戦争のなかで重要な役割を担ってもきたのである。例えば民間のラジオ局が開設される以前に、ラジオはすでに軍用に利用されていた。メディアと戦争の関係という問題は、この難解な書物の中では比較的理解しやすく書かれている。この観点にのみ焦点を絞って拾い読みしてみるのも良いかもしれない。

筑摩書房, 1999 請求記号 :C63-784

ベートーヴェン ウェリントンの勝利(戦争交響曲) op.91 "Battle symphony"
楽譜には黒点 はイギリスの大砲、白点 はフランスの大砲と区別されている。

N.Y. ドーヴァー出版, 2002 請求記号 H43-900

日本平和学会編 芸術と平和

この本では「平和」という価値を伝える手段として「芸術」に着目している。「平和研究における音楽の可能性」という項目では、伝達手段としての音楽機能の限定せずに、音楽をどのように秘話的に活用するかという視点を含めて論じている。戦争のない状態を平和と捉えた場合、その状態を作り出すために、また戦争を予防するために、音楽をどのように活用してきたのか。これまでどのような取り組みがあり、学問的アプローチがあったか、「政治」「異文化理解」「教育」といった面から考えられている。

シリーズ 平和研究 ; 第 29 号 早稲田大学出版部, 2004 請求記号 J106-580

今谷和徳著 中世・ルネサンスの社会と音楽

中世・ルネサンスの音楽を、歴史的な事実と絡めながら解説した、歴史書とも音楽書とも言える一冊。百年戦争や宗教戦争など、戦争が歴史と、そして音楽と、深く関わっていることがわかる。

音楽之友社, 2006 請求記号 J109-912

レコード芸術 2005年6月 vol.54 No.657

オットー・ビーバによる、戦争と音楽に関する記事が掲載された。戦争音楽を歴史的にとりあげ、実は戦争を描いた作品が多く存在している事を簡潔に、そして読みやすく解説している。

音楽之友社 請求記号 P0658

櫻本富雄著 歌と戦争

アテネ書房, 2005 請求記号 J104-847

森脇佐喜子著 山田耕筰さん、あなたたちに戦争責任はないのですか
: 新谷のり子さんへのインタビュー「なぜ反戦歌を歌うのですか」

梨の木舎, 1994 請求記号 C58-908

AV 資料

録音資料

ベートーヴェン《ウェリントンの勝利》

この CD では、188 発の大砲、及び多数のマスケット銃の一斉射撃がベートーヴェンの指示通り録音されている。

エリック・カンゼン指揮、シンシナティ交響楽団 1982 年録音 請求記号 XD497

『君が代のすべて』

「君が代」の『歴史と変遷』と『発展と返送』がよくわかる一枚である。<君が代のすべて>というタイトルにあるように、この CD は君が代だけで構成されている。そのた

め、現在の君が代への成り立ちを学ぶ際に、大変便利に活用することが出来る。日本の国歌の様々な様式の変化が見て取れる、とっておきのCDである。

1903-2000 年録音 請求記号 XD45176

『新 効果音大全集. 7, 戦争・軍隊』

戦争をテーマとした圧倒的な迫力の一枚。マシンガンやミサイルをはじめ、爆発音のバリエーションなどのサウンド世界が詰め込まれている。戦場にいるような錯覚に陥る。戦争を知らない私たちには衝撃の一枚。

1987 年発売 請求記号 XD12209

セルゲイ・プロコフィエフ《戦争と平和》

19世紀初頭のロシアを舞台に、戦争と様々な人間ドラマを絡めて描く壮大なオペラ。平時と戦時、民衆と貴族、愛と憎しみといった相対する要素をオーケストラとともに豊かにプロコフィエフがまとめあげている。

ルスラン・ライチェフ指揮、ソフィア国立歌劇場管弦楽団、合唱団、他 1986 年録音 請求記号 XD5566-5568

『永遠のフォーク・ヒット : The 60's-70's ; 4 戦争は知らない~花嫁』

60~70年代のフォーク・ヒットソングを集めたシリーズ作品の第4弾に、ザ・フォーク・クルセダーズの「戦争は知らない」が収録されている。当時では有名な反戦歌であり、後に続くアーティストに大きな影響を与えた一曲。他にも反戦、反核の意味の歌詞をつけてカバー作品を歌っているRCセクションなどのフォーク・ソングも収録されている。

1992 年発売 請求記号 XD18240

三善晃《レクイエム》

全三楽章からなる混声合唱と管弦楽のための作品。テキストは9名の日本人による反戦詩と、5名の海軍特別攻撃隊の遺書によりそれぞれ抜粋となっている。三善作品の多くは「生」と「死」というテーマのもと彼のメッセージが存在するが、このレクイエムはかなり直接的な表現と残酷な詩により激しく聴衆の心に迫ってくる。死者のための鎮魂歌ではない。間違いなく、生きている聴衆にむけた「死」に対する問いかけなのである。

尾高忠明指揮、NHK交響楽団、東京混声合唱団 1985 年録音 請求記号 XD984

ジョアン (ホアン)・セレロールス《戦争ミサ》

イレネウ・セガラ神父指揮、モンセラート修道院聖歌隊、バルセロナ・アルス・ムジケー 1977 年録音 請求記号 XD13244

Clement Janequin : Messe "La bataille"

Ensemble Clement Janequin ; Les Sacqueboutiers de Toulouse ; Dominique Visse, conductor ; Jan Willem Jansen, organ. 1994 年録音 請求記号 XD32788

ベンジャミン・ブリテン《戦争レクイエム》作品 66、クルツィストフ・ペンデレツキ《広島の犠牲者に捧げる哀歌》

ヘルベルト・ケーゲル指揮、ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団 (第1曲)、ライプツィヒ放送管弦楽団 (第2曲)、他 1989 年 (第1曲)、1978 年 (第2曲) 録音 請求記号 XD37330-37331

映像資料

『イマジジン』

生涯反戦を訴え続けたジョン・レノンのドキュメンタリー映画である。この映画には、客観的なナレーションがなく、ジョン・レノン自身の言葉を中心に親しかった人々の言葉を加えてあるのみで、彼の音楽については映画自身が語ってくれる。全 35 曲が収録されているが、中でもチャプター35 に登場する「ALL YOU NEED IS LOVE」と人々のピースサインは、目に耳に焼きついて離れることはないだろう。

1988 年製作 請求記号 VD348

『アジアの音楽と文化 第 5 巻, 授業への展開. 1』

学校教育にカンカラ三線がどう取り入れられているかがわかる。カンカラ三線を組み立てるだけでなく、更に演奏することによって、自分の生まれた地域の、自分たちの音楽を学ぶ。

1998 年発売 請求記号 VD3757

セルゲイ・プロコフィエフ《戦争と平和》

本映像は 1991 年にマリンスキー劇場で収録されたライブである。トルストイの原作が国家観や宗教観を問うた歴史哲学小説であるのに対して、プロコフィエフのオペラ版は国という枠組みにとらわれないロシア民族の底力と、人間個人の存在の大きさや生命の尊さを前面に出している。また、この字幕作業が行われていた頃がイラク戦争中で、そのニュースを見るとナポレオンの戦争がほどく身近に感じられ、悲劇はすぐそこにおきているような気がしてならなかったとスタッフは語っている。今も昔も人間は変らぬ愚行を繰り返し、4 時間のオペラは私たちにこの教訓を実に饒舌に語ってくれている。

ヴァレリー・ゲルギエフ指揮、キーロフ歌劇場合唱団、管弦楽団、他 1991 年録画 請求記号 VE620-621

『伊福部昭の自画像』

石井真木、伊福部昭、黛敏郎指揮、新星日本交響楽団、他 1991 年録画 請求記号 VD1280

展示パンフレットは図書館ホームページからも入手できます。(バックナンバーも公開しています。)

<http://www.lib.kunitachi.ac.jp/tenji/tenji.htm>